

一般講演

1 自由咀嚼と片側咀嚼の特徴

○本間 和代, 河野 正司, 本間 済

(新潟大学大学院医学総合研究科 摂食機能再建学分野)

【目的】

咀嚼は摂取した食物を粉碎し、唾液と混和して食塊を形成し、嚥下に至るまでの行為であるが、初回嚥下までの咀嚼回数には大きな個人差が認められる。これにはさまざまな要素の関与が考えられるが、今回は咀嚼習慣に注目した。自由咀嚼は片側咀嚼と比較し、嚥下までの咀嚼回数が少ないと報告されているが、その様相は明確ではない。そこで本研究では唾液分泌量、咬合力、臼歯部接触点数等を測定し、個々の条件下での自由咀嚼と片側咀嚼の差異について調べた。

【方法】

被験者は、顎口腔系の機能に異常を認めず、歯列に中間欠損のない年齢19歳から27歳（平均年齢19.7歳）の女性117名、被験食品はピーナッツ3粒（約3g）を用いた。唾液量は、刺激唾液を採取、咬合力は長野計器製作所製、オクルーザルフォスメーターGM10を使用し、上下顎第一大臼歯間を測定、接触点数は、ジーシー・バイトチェッカーにより臼歯部ABC点の

合計値を求めた。

【結果と考察】

全被験者の初回嚥下までの咀嚼回数は自由咀嚼の回数は片側咀嚼と比較して11%少なく危険率1%以下で有意の結果となった。唾液量の多い群は、自由咀嚼の回数は片側咀嚼と比較して12.1%、少ない群では同様に8.5%少ない値を示した。また、咬合力の大きい群では、自由咀嚼の回数は片側咀嚼と比較して7.7%、小さい群では11.9%少ない値を示した。接触点数の多い群では自由咀嚼の回数は、片側咀嚼と比較して11.4%、少ない群では8.5%少ない値を示した。咀嚼回数が少ないことは咀嚼能率がよいと考えられることや、片側咀嚼では粉碎粒子が口腔前庭に貯留しやすいことから、自由咀嚼をすべきであり、その習慣づけの指導が大切であると考えられる。唾液量の多い群と咬合力の小さい群において咀嚼回数が多く、咀嚼能率が悪いと思われる結果が示されたことは、通常の食塊形成が行われていないと考えられ、今後の検討が必要である。

2 明倫短期大学学生の高齢社会に対する意識調査

○渡辺 美幸, 本間 和代, 金子 潤 (歯科衛生士学科)

【はじめに】

本学では、要介護者のQOLの向上に口腔環境の改善や管理が重要であると考え、平成9年度よりカリキュラムに歯科口腔介護・演習ならびに介護保険施設における臨地実習を導入した。その教育効果を上げるため、学生が老人や高齢社会をどのように捉えているか、また、臨地実習により高齢者や介護への理解等がどのように変化したかを知る必要があった。そこで1年前期と2年後期に同一内容のアンケート調査を行い、学生の意識を調べたので報告する。

【対象者】

平成13・14年度に本学歯科衛生士学科に入学した学生（女子）154名とした。

【調査方法】

調査項目は、老人年齢の認識度、老人に対するイメージ、将来における両親との関わり（同居の意思、要介護状態時の対応等）で、質問紙法により調査した。

【結果および考察】

老人年齢の認識度は、65歳以上と答えた者が約43%で臨地実習により高まった。老人に対しては、優しく、穏やかで、礼儀正しいと感じる傾向は非同居群に強くみられ、口うるさく、自分勝手に愚痴っぽいと感じる傾向は同居群に強く、老人を現実的に捉えていた。また、将来の両親との関わりは、同居の意思があると答えた者が13%でわが国の同居率の減少傾向を裏づける結果であった。両親が要介護者となった場合は、自宅介護を希望する者が67%で両親の老後を考えている様子が伺えた。将来、実施できると思う介護は、1年次は食事介助が93%、歯磨きが77%、義歯清掃が75%と高かったが、2年次はさらに5~20%増加し、臨地実習により介護意欲が高まったと言える。

今後、歯科口腔介護教育の効果を高めるため、本調査結果を踏まえ、若者の高齢社会に対する意識を理解しながら、学生教育をあたっていくたい。